

明治初期 京都における古器古物の展観

『以文小集記』から

中澤伸弘

□ 要 旨

徳川時代中期から有職故実の学の盛んになるにつれ、古い時代への憧憬の念が深まり、古器古物を玩賞する好古の気風が生じた。このやうな所有する古器古物を持ち寄り、それを展観し、お互ひに称賛や批評をし、または考証する会が自づと開かれるやうになつた。文化年間から幕末にかけて京都で毎月行なはれてゐた「以文会」の活動は、その記録からわかるものである。

ここに紹介する『以文小集記』は明治七年から十年にかけて京都の以文社が行なつた古器古物の展観記録である。これが嘗ての以文会とどう繋がるかはわからないものの、

このやうな会がとさやかながら開かれてゐたことを明らかにする。

□ キーワード

以文社 『以文小集記』 古器古物展観 進藤千尋
明治初期

一

本稿は架蔵（松乃屋文庫、宮崎和廣氏旧蔵委託本）の『以文小集記』の解題と展観目録の部分翻刻である。

古器古物を蒐集し、それが何であるかを考証する尚古の気風は国学の学問の発展とともに盛んになつて行つた。中でも徳川時代の文化年間から天保嘉永に至る期間に、京都の文人によつて古器古物の展観の会である「以文会」が結成され、毎月十日に各自の珍藏する什物を持参して参会し、相互に研究したことの記録は三宅米吉によつて『以文会筆記』として昭和四年に刊行されてゐる。この京の以文会は時代の流れの中でその後どのやうになつて行つたかはわからないものの、当該資料は明治七年になつて、この「以文」を名乗る「以文社」が同じく京都において結成されてゐたことを示すもので、明治七年から十年にかけて京都で十五回行なはれた以文社の展観（以文小集）の記録である。当該資料については、その関連するものについて書かれたものはあるが、そのものについては未だ知られてゐない唯一の一点のものと思はれ、貴重なものと思断できる。

東京寛都以来、次第に京都の町が廃れ行くのを留めるべく、その活性化をかけて明治四年から毎年西本願寺で京都博覧会が開催されるやうになつたが、こちらは古器古物の展観とともに産業殖産の方面にもわたり、主に後者の方面に意が注がれた。そのやうな状況の中で当時の京都において、ささやかながらのやうな会が開かれ、ここに翻刻されたやうな古物が展観されてゐたのである。古器古物を蒐集し伝えてきたことも重要であ

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

り、その様子や、参会してゐた当時の人物について考へたく思ふ。

二

まづは手許にある『以文小集記』の簡単な書誌と内容を述べる。

書誌 写本。竪二十五糎、横十七糎。表紙共紙墨付六十五丁（但し何も書かれてゐない丁が前後、中ほどに二、三丁ほどある。）表紙左上部に小さく「以文小集記」右下に「社友」とあり。内題なし。一丁オモテに三顆の以文社印を押す。三丁オモテに「以文小集則」とあり、その後集会の規則を載せ、五丁オモテから第一回の記事となる。文字の大きさ改行など適宜であり、その都度に書き込んだものである。また全ての丁が、毛筆で書かれた地方文書の裏に書かれてゐて、下書きであつたことがわかる。いづれの時に清書するつもりであつたのか、またこれを基に清書されたものが存在するかは不明である。本書は後人によつて丁寧裏打ちがなされてゐるが、その紙背文字が透写しとなり大変判読しづらい。

本文の筆者名は書かれてゐないが、初回の参加者の名の上に「発意催」とあつて、発案者であること、毎回の参会者名の最

後に進藤千尋の名が書かれ、また千尋、千尋等、予(自分の意)などの名前の記載となつてゐること、出品者名に進藤とあるべきところに「進」のみ略記されてゐる点などから、進藤千尋であると思はれる。当時以文社の運営がどのやうになされてゐたのか、不明な点が多いが、明治九年二月の十三回の折に、水荃氏から出品された出品物に次のやうな「古器ノ品評書」が以文社から出されてゐて、これを書いたのが千尋(進藤老人勸物)である、

外二先會水荃氏ヨリ出品有 古器ノ品評書 千尋稿

九年一月十五日 進藤千尋

右進藤老人勸物之

一同無異物候 第一之古物と可賞候也

明治九年一月十五日 ㊦ 以文小集會

などの諸点から会の運営に大きく関与してゐたことがわかる。

千尋は明治十一年に六十一歳で逝いたので、発会の明治七年当時は五十七歳であつた。

内容は毎月決められた日に、会場(月により変はる)に参会した人物名が書かれ、また持参し展覧した品物名、その作者(筆者)の小伝を書いた「札記」を書き留めてある。「札記」とは次のやうなもので例へば第一回の「後青龍院宮真跡 祖師御消息写」であるなら、

札記 後伏見院皇子

入道一品尊道親王 諱尊省 青蓮院門主

母入道大納言實明卿女

正慶元八廿一生 應安六五五三品 康

應元二 一品

應永十七五薨 七十一 號青龍院宮 葬西山

青龍寺

また第二回の「小色紙 和哥式首 豎四寸六分半 但切レ也口半カ」であるなら、

札記 後崇光院御子 後小松院御猶子

後花園院 御諱彦仁

應永廿六六十八降誕 正長元七廿八踐祚

文明二十二廿七崩五十二 奉號後文徳院 改

後花園院

と言ふやうに、その人物がどのやうな者か、またその生歿について書いてゐるものである。但しこれも初期にはかなり詳細に書かれてゐるが、回数を重ねるたびに簡略化されたり、書かれてゐないことが多くなる。また毎回の会にはその担当者(会当)と補助、会計がゐて、まわり番で努めてゐたこともその記録からわかるのである。

三

巻頭に「以文小集則」と言ふ規則が書いてあるので、これを挙げておく。

以文小集 則

第一章

- 一 皇后皇妃皇子皇女等ノ御筆跡其外諸物御傳ニ係ノ品ヲ集會スルヲヲ催ス

第二章

- 一 前件ニ付諸君考説アラバ紙ニ書シテ出シ賜ランヲヲ希フ

第三章

- 一 會日毎月廿六日トス 午前八時ヨリ午後四時迄諸品并考書ヲ列シ尚席上ニ於テ高評ヲ希フ

第四章

- 一 諸出品可成丈ケハ會前ニ出給ハンヲヲ希フ 厚ク物品ヲ保護シ逐一預證ヲ差出シ會後日持主ヘ返附スベシ 但本日隨身ニテモ適意タルベシ

第五章

- 一 品物ニハ小傳ヲ付シ持主ノ姓名ヲ書記スルノ小札ヲ付ベシ 若頭名ヲ望サル方ハ其意ニ随フベシ 但出品

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

手数料等ハ一切不申受

第六章

- 一 席上告札雜言ヲ禁ズ 貴重ノ物品ヲ敬スルガ故也

第七章

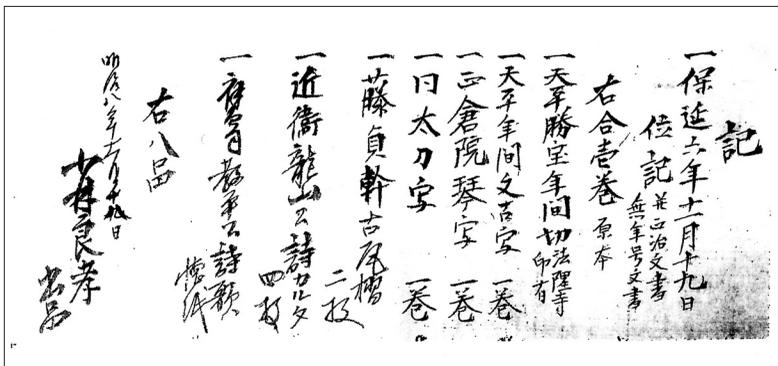
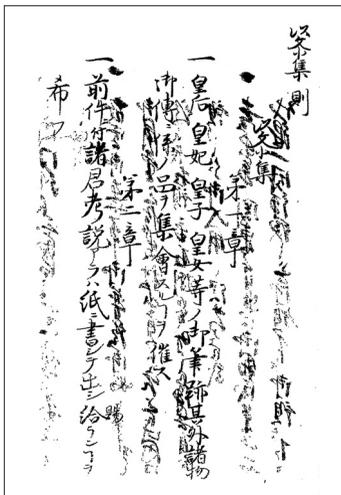
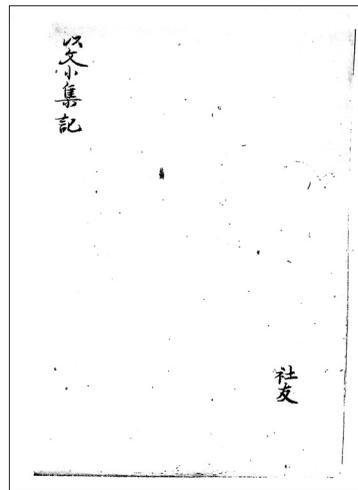
- 一 飲食ハ諸君ノ適宜ニマカス 會中關係スルナシ

七年十月廿六日 以文小集 社友

㊦

この七章の決まりは第一回の集会のあつた明治七年の十月二十六日に決められたやうである。即ち、それ以前には「以文社」の集まりはなかつたことが言へる。またこれによると此の會が「皇后皇妃皇子皇女等ノ御筆跡其外諸物御傳ニ係ノ品ヲ集會」することを目的としてゐたことがわかる。東京に奠都されたものの長く王城の地であつた誇りはこのやうに「皇后皇妃皇子皇女等ノ御筆跡」を多く伝存し、所有してゐる人の名誉と重なるものであつた。そしてあくまでも考証の會であり、「諸君考説アラバ紙ニ書シテ出シ賜」へ、また「席上告札雜言ヲ禁ズ貴重ノ物品ヲ敬スルガ故也」と言ふところに単なる珍物展観とは相違する学究的な態度を見るのである。

集會の日は毎月二十六日と決められたやうだが、このあとどうしたことか第二回から月十六日となり、四回目の翌年二月から十八日を恒例に開かれた（九年は十五、六日など若干の相違はあるが）やうである。



ところで、以文社には次のやうな印鑑があつたことが一丁オモテに押されてゐることからわかる。

①の印鑑は「以文社の印章」と脇に書かれてある。紺色で押されてゐて、松の枝を円形に組んだ模様の中に朱の文字で「以文社」と毛筆で書かれてある。

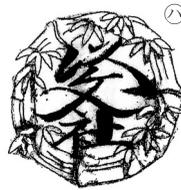
②の印鑑は「正品員外共札記二用之」との説明が書かれてある。①と同じ模様で紺色で押されてあるが、中央に朱文字二行で「以文社／拝鑑」とある。出品物の説明の札記に押したやうである。

③の印鑑は「員外鑑定印」と脇に書かれてある。紫色で押されてゐて、竹の枝を円形に組んだ模様の中に朱の文字で「以文社」とある。先にも書いたが、以文社は古器古物の鑑定をしてゐたやうで、その折にはこの印が証紙に押されたやうである。

また、「以文小集則」の文末に④の印がある。朱色で押されてゐて、梅の花と枝とを円形に組んだ模様の中に朱の文字で「以文社」とある。このやうに松竹梅の三種の模様の印を用意して使用してゐたのである。第二回の折には弁当のための「飯切手」が配布され、その図が書かれてゐて、そこには黒印であるが、①と同じく竹の模様の印に「以文社」と朱で書かれてゐる。

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

四



参会者及びその総数を表一として挙げておく。これにより十五回の参会者の数が知られ、その消長がわかるものである。大方十人から二十人には及ばない範囲であるが、八回目の五人が少なく、十二回目の三十八人などはかなり多い方である。総参加者は十五回で百三人となる。中には石野外四人、千某外三人などとその名が不明のものもある。皆勤は主宰者の進藤千尋

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

水荃孟末	多久顯明	浦野勝次	千与太郎	石束一郎	熊谷茂七	津戸某	松山錦平	野村敦明	日比野道彦	富永治道	岡本保益	馬来伸	磯谷台陽	中島勝彬	若松永福	山科正恒	下橋敬亮(隠居)	無名二人	幸前元紀	大浦宗直	植西泰明	植西明俊	
																					⑤	⑤	⑤
																	⑥	⑥	⑥	⑥			
														⑦	⑦	⑦	⑦				⑦	⑦	
													⑧										
													⑨										
							⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩								⑩		
						⑪					⑪						⑪						
⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫											⑫	⑫				⑫		
											⑭	⑭	⑭										
											⑮										⑮		

安井九兵衛	佐野久成	田中喜十郎	津田長興	山下豊泰	聚光院牧宗	近藤律山	中山某	浦野某	馬場頭東	北小路叟助	千某 外貳人	河原崎嘉兵衛	河原崎利兵衛	安井九兵衛	松室重礼	山崎庄蔵外二人	石野外四人	山中猷	孤蓬庵	金龍院	小林雄精	小川為義	
					⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑫
⑬	⑬	⑬	⑬	⑬																			
				⑮																			

鈴鹿熙清																			①
鈴鹿義鯨																			②
松岡正根																			③
橋口兼則																			④
野村綱紀																			⑤
鵜飼敬																			⑥
石津登三郎																			⑦
石津時三郎																			⑧
																			⑨
																			⑩
																			⑪
																			⑫
																			⑬
																			⑭
																			⑮

滝原勝信																			①
勢田章甫																			②
林一郎																			③
立花青齋																			④
馬場文英																			⑤
山根□輔																			⑥
井関良顕																			⑦
戸田保憲																			⑧
																			⑨
																			⑩
																			⑪
																			⑫
																			⑬
																			⑭
																			⑮

日付

- ① 明治七年十月二十六日 十七人
 ② 十一月十六日 十三人
 ③ 明治八年二月十六日 十三人
 ④ 三月十八日 十三人
 ⑤ 四月十八日 十六人
 ⑥ 六月十八日 十五人
 ⑦ 七月十八日 十四人
 ⑧ 九月十八日 四人
 ⑨ 十月十八日 九人
 ⑩ 十一月十八日 十四人
 ⑪ 十二月十一日 九人
 ⑫ 明治九年一月十五日 三十八人
 ⑬ 二月十五日 二十人
 ⑭ 三月十六日 十四人
 ⑮ 明治十年五月十六日 十七人
 ⑯ 三月十六日 十四人
 ⑰ 明治十年五月十六日 十七人

会場

- ① 武田旭鶴二階
 ② ⑥ 聖護院村右左亭
 ③ ⑤ ⑬ ⑭ ⑮ 錦織森榭亭
 ⑫ 徳大寺総見院

一方、表二は毎回の出品者とその数である。十五回で出品者

は三十二人、その数二百六十六点に上る。但しこの点数の数へ

方が統一されておらず、正確な数は把握できない。例へば十回
 に出品した小林良孝は別に附箋があり、そこには別掲の如く

(附箋)

記

- 一 保延六年十一月十九日位記
 一 正治文書
 無年号文書
 右合巻 原本
 一天平勝寶年間切 法隆寺印有

一天平年間古文写 一卷

一正倉院琴写 一卷

一同太刀写 一卷

一藤貞幹古瓦摺 二枚

一近衛龍山公 詩カルタ四枚

一鷹司教平公詩歌懷紙

右八品

と八品とあるが、本書における小林氏出品のものは、鷹司教平公詩哥／古瓦写 小林墓摸／観古帖 古瓦集序 書状／保延六年 位記 次 天皇御璽印／天平勝寶年間文書切 古印切 正藏院中琴打摸 同朝鮮ノ物 太刀 藤貞幹古瓦写二枚／近衛龍山 詩カルタ、の大きく分けて六点と記録されてゐる。このやうに考へると細かにみれば出品数をもつと増えることと思はれる。出品者三十五人中、参会者に名のない者が十三人ゐるが、これは出品だけしたのであらう。先の小集則にあるやうに事前に出品を受け付けてゐたやうなので、これも可能なことであつた。十五回通して出品の多い者は並河尚教が九回六十点、小林良孝が同じく九回五十五点と多く、次いで進藤千尋が十回四十三点と続く。ついで津田信克が五回十五点、立入宗信が五回十二点となる。

なほ、参会者についてわかることを次に述べておく。

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

錦織久隆、押小路実潔、若王子遠文は下級堂上である。錦織家は卜部家、押小路家は藤家であつて後に子爵となつてゐる。両家ともに東京へ移住するが、この時はまだ在京であつたやうだ。若王子家は聖護院院家であつて明治二年に堂上に取り立てになつた。進藤千尋は青蓮院の坊官で門跡寺院の一切を取り仕切る役目の諸大夫であつた。富士谷成元（御杖）の門人で、成元の歌集『北辺一日千首』には福田美楯の序文（弘化四年）と千尋の跋文（年不明）があつて、成元の歌について驚きの賛辞を書いてゐる。明治十一年七月二十七日六十二歳で歿した。墓は知恩院にある。並河尚教、津田信克は滝口、矢盛教愛は明治元年の『都仁志喜』に「諸陵寮史生正七位下」とある。竹川友廣は絵師で慶應三年の『平安人物志』の「画」之部に載る。井上謙三は新選組に捕縛された老僧であらうか。伊藤快常は若王子社の神職で、下橋敬長は五撰家の一である一條家の、また小林良孝は同じく鷹司家の諸大夫の家柄である。殊に下橋敬長は『幕末の宮廷』の著者で、その有職方面における博覧強記は有名である。立入宗信は禁裏の御蔵職、植西家は堂上の今出川家の諸大夫である。それぞれの家柄がこのやうな古器古物を蒐集し伝へたのである。その他ここに見える者は当時の京都におけるそれなりの家柄の者であつたのであらうが、その詳細はわからない。存じよりの方があつたらご教示を願ひたい。

五

次に十五回に及ぶ以文小集がどのやうに行はれたかを、その概要を記しておく。出品物については別に翻刻して挙げ、ここでは触れない。

第一回は先にも述べた明治七年十月二十六日であつて、その日の出席は十七名であつた。毎回参会者の氏名が書かれてゐるが、第一回の出欠については詳細であるので次に挙げておく。

一 来集交名 速遅ト尚齒トニヨル 非以巧拙次第

華族 従三位 錦織殿 諱久隆

正四位 押小路殿 諱實潔

従五位 若王子殿 遠文

士族 井上謙三殿 新熊野村

大橋方武殿 下京一區今在家丁

矢盛教愛殿 堺町御池北扇屋丁

並河尚教殿 上京字百万遍屋敷

同 総 殿 前人男

商 鱗星助太郎殿 浪華鴻彦

神官 伊藤快常殿 若王子社祠堂 権訓導

画職 竹川友廣殿 室町四條南

商 宮部惟孝殿 三條堀川東

一 箭田彦八郎殿 木屋丁二條南

一 尾笹政藏殿 油小路下長者丁北

発意催 進藤千尋

補助 〃 為名

〃 為美

一 當日不參之節有之方々

町田能久 雨森善四郎 浅山茂平 西田耕造

西谷元圃

一 會席 樵街三條北 武田旭鶴 奥二階

一 當日雜費賄方 宮部惟孝 勘定取集周旋 大橋方武

一 席敷設之具

毛氈二枚 並河氏 同三枚 進藤 蛭かぎ 竹

川氏 田葉二 進藤

茶具 武田 席同上 茶菓 弁當 糊等八席上

買上ゲ

一 出品札記 不殘不得認之 表口掛札 奥二階以文小集

玄関 以文小集入口

二階上り段 以文小集上り口 いづれも紙札也

第一回の参会者は十七人、六家から二十四点が出品され、そのうち進藤千尋が十二点であつて、本会に寄せる思ひがわかる。明治維新以降、主立つた公家華族は東京へ移住したが、ここに

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

見える錦織久隆、押小路殿實潔、若王子遠文はまた京都にゐた。

また当日の欠席者名がある（但しこゝ一回のみであるが。）ことから事前に開催の案内をしてゐたやうである。

当日の集会場所は「樵街三條北の武田旭鶴宅の奥二階」であつて、表口に「奥二階以文小集」、玄関に「以文小集入口」、二階上り段の所に「以文小集上り口」と書いた、いづれも紙札の「掛札」を書いて案内標にしたことがわかる。先の「以文小集則」によれば終日の開催の為、弁当も用意されてゐたやうで、その賄方などに宮部惟孝や大橋方武が当たつてゐる。発意催の進藤千尋（為周と言ふ）は為名、為美の二人の子息とともに裏方の役を務めたやうである。

第二回は翌月の十一月十六日に聖護院村の右左亭を会場に行なはれ、会當には一回と同じく宮部惟孝、補助として大橋方武、下橋敬長の二名が当たつた。※以下出席の記載は毎回本文の表記のまま

（十一月十六日 以文小集席）

聖護院村右左亭 会當宮部惟孝 補助大橋方武 下橋敬長
出席 若王子殿 井上先生 荒木先生 並河先生 矢盛先
生 竹川友廣殿 小鳥殿 進藤三人
一食道 森榊 飯切手 雛形 札金一朱ト引替ル

一食道 森榊

飯切手

雛形



一席料 拾式盤式間 床沓間半 脇棚沓間半 金三拾銭
毛氈 忝枚若王子殿 忝枚進藤 忝枚井上氏

参会者は十三人、前回よりやや少ない。四家から十点が出品されやはり千尋は七点を出してゐる。今回は凶のやうな飯切手が金一朱と交換で配られたやうである。参会者は十二人で、一回に参会した錦織、押小路の二人はこのあととは出てゐない。

第三回は翌年二月十六日に行なはれた。十二月、一月がなかつた（休会）やうなので、既に「則」に言ふ毎月の実施は難しかつたやうである。

（八年二月十六日）会席錦織森榊舎 會當下橋敬長 補助

宮部惟孝

出席 從五位若王子遠文 権訓導伊藤快常 立入宗信 小
林良孝 荒木氏敬 並河尚教 進藤千尋 西谷淇水 森寛
齋 遠藤弥三郎 同又兵衛 同某 宮城二郎 下橋敬長

宮部惟孝

一設 毛セン 式枚伊藤氏 二枚進藤

参会者は十四人。六家から十一点が出され、今回も千尋の三点が一番多い。会場は錦織の森榭舎。會當下橋敬長、補助に宮部惟孝が当たった。出品は十点で員外が一点であった。員外とは何を意味するのかわからないが、全体的に見ても第一回から比べると数は少ない。

第四回は三月十八日であった。以後この月から十八日が定例となる。

(三月十八日小集例席) 會當小林良孝 補助下橋敬長 宮

部惟孝

交名 従五位若王子遠文 小林良孝 蔭山秀文 並河尚教
矢盛教愛 荒木氏敬 義具男津田信克 大津留惟明 下橋
敬長 宮部惟孝 竹川友廣 進藤千尋 進藤為美
敷設 毛セン一枚若王子殿 同一枚竝掛具ヒルカギ掛

簾等 進藤

参会者は十三人。九家から十四点が出品された。千尋の四点が多い。会場はここには書かれてゐない。會當は小林良孝で補助に下橋敬長、宮部惟孝が当たった。

明治初期、京都における古器古物の展観(中澤)

第五回は四月十八日で、会場は錦織の森榭亭であった。

(四月十八日 月次以文小集) 会席森榭亭 會當秦久敬
補助例之近當三輩 會計宮部惟孝

出席 小野澤基豪 矢盛教愛 小林良孝 津田信克 立入
宗信 並河尚教 植西明俊 同泰明 下橋敬長 伊藤快
常 大浦宗植 遠藤千胤 宮部惟孝 秦久敬 千尋等也

毛セン一枚若王子家御品

参会者は十五人。七家から三十六点と出品数は増えたが、大
方が並河尚教(十九点)の出展である。千尋は今回はこちらへ
の出品を見送つたと見え、一つも出してゐない。こちらと書い
たが不思議なことにこの日同じ場所「年号展覧」が同じ以文
社が主催して行なはれてゐたことである。その目録が別にあつ
て、管宗次『京大坂の文人 続々々』に翻刻されてゐるが、そ
れによればこちらは下橋敬長所有の大化二年の宇治橋断碑から
立入宗信所有の慶長五年の禁中米銀納帳まで、年号が書かれて
ゐる古器古物が一七〇点に及んでゐる。本会との重複は並河氏
の所有の「大治元年地券」「承安三年沽却券」「永仁六年 灌頂
文書」の三点である。並河尚教が複数同じものを所持してゐた
のか、此の会との兼ね合ひがどのやうであつたのかも不明であ
る。こちらの目録の「年号展覧条則」には次のやうにある。

一金石竹紙布草何ニヨラズ年號文字アル物品ヲ展観シテ上

代ノオモムキヲ見ルコトヲ要ス是玩弄ニ似テサナラズ本
教稽古ノ学梯トナサントナリ

一年号ハ上ミ大化ヨリ下モ慶長ニ至リ凡九百七十年間其号

二百余一号一品ニ限ル

一大化以前延徳以後奇僻ノ號往々史伝ニ散見スミナ公行ノ

モノニアラザレバ今コレヲ除ク

一元和以後ノ號ハ後会ニ集ベシ

一出品真物ヲ以テスベシ去レドモ千年ノ古キ二百ノ大員コ

レヲツクス能ハズ其欠員ハ影写臨摸ヲ以テ補フベシ

一出品ニハ預券ヲ以テ持主ニ呈シ会后三日ノ内ニ是ヲカヘ
スベシ

一会日四月十八日 大風雨順延小雨不嫌

一會度洛東錦織森舂舎

八年四月

以文社会當

小林良孝

補助

下橋敬長

津田信克

秦 久敬

進藤為名

會計

宮部惟孝

こちらの会はその目標を「本教稽古ノ学の階梯」にしてゐて
全く別の組織のやうであるが、会当を小林良好とし、補助に下

橋、津田、秦、進藤為名（千尋の子）、會計が宮部となつてをり、
重なる人物があるが別の催しであつたやうである。この關係が
よくわからないである。

第六回は六月十八日に行なはれた。

（六月十八日 以文小集也）

會當津田信克 席右左亭

來集人名 並河尚教 小林良孝 秦久敬 下橋敬長 小野

澤基豪 大浦宗植 幸前元起 小寫貞五郎 津田信克 宮

部惟孝 千尋 外ニ下橋隱居 無名式人

毛セン式枚若王子殿ニテ借用 會計 宮部下橋

參会者は十三名。新人は下橋敬長の父敬亮ほか三人が來た
外、同じような顔ぶれであつた。出品は少なく、二家から二点
あつたのみであつた。記録が欠けてゐるのであらうか、六七八
回は出品数が従來に比して少なく五点以下である。会場は第二
回と同じく聖護院の右左亭であつた。

第七回は七月十八日に行なはれた。

（七月十八日 月次以文小集）

并元和八年至明治年号曆 親在別紙

來集人名 矢盛教愛 並河尚教 小林良孝 宮部惟孝 下
橋敬長 若松永福 山科正恒 下橋敬亮 秦久敬 中寫勝

彬 植西明俊 同泰明 小野澤基豪 千尋等也

毛セン二枚若王子殿分借用 酒舛求之

参会者は十四名。二家から五点の出品があつた。賀茂の鳥居の切れ端なども展覧されてゐるが、数が少なく、ここも記載漏れがあるのか、判然としない。

八月休會 珍しく休會であつた。やはり猛暑によるのであらう。

第八回は九月十八日に行なはれた。

(九月十八日 例席)

磯谷台陽 下橋敬長 宮部惟孝 小野澤基豪 進藤千尋

参会者は五名で、磯谷台陽が初参加。一家から一点の出品しかなかつたが、その家の名を欠く。ただ本当に一点であつたのか、または記録忘れか定かではなく断定はできない。少なくとも五名の参会はあつただからもう少し出品されてゐてもよからう。

第九回は十月十八日に行なはれた。

(十月十八日 例席)

小林良孝 矢盛教愛 津田信克 秦久敬 下橋敬長 宮部

惟孝 磯谷台陽 井上謙吾 並河尚教 進藤千尋

明治初期、京都における古器古物の展覧(中澤)

参会者は十名で、初参加はゐない。このところの低調さに比すれば、十家から二十三点の出品があるなど、随分盛會であつた。並河家から七点の出品があつた。

第十回は十一月十八日に行はれた。

(十一月十八日 例席 集会)

小林良孝 矢盛教愛 下橋敬長 宮部惟孝 伊藤快常 磯

谷台陽 馬来伸上賀茂宮司 岡本保益同欄宜 大浦宗植

八十一歳 富永治道士族 日比野道孝吉田欄宜 野村敦明

松山錦平

参会者は十三名で、賀茂の宮司や欄宜、吉田の欄宜などが参加した。今まで神職は若王子の伊藤氏のみであつた。また五家から十二点の出品があつた。

第十一回は十二月十一日に行なはれた。日付が十一日となつたが、明治八年は二月から月次に十八日に順調に十一回実施されてきた。今回は一年最後の納會である。

(十二月十一日 月次集会) 納會例席 朝より追々来集

小林良孝 宮部惟孝 津田信克 山科正恒 津戸某 下橋

敬長 馬来伸 予(千尋) 為美等也

一毛セ 二枚若王子家ニテ借

一年最後の納会としては、参会者は九名と少ない。四家から十一名の出品があつた。なにはともあれ一年間無事に続いたことに安堵したことであらう。

第十二回は年が改まつた、明治九年の一月十五日に行なはれた。以下十五、六日である。

(九年一月十五日 月次小集) 大徳寺中総見院□□

會當山科白雲 津田信充

補助小林良孝 植西泰明等

来名凡左之通 熊谷茂七 石東一郎 千与太郎 浦野勝次

多久顯明 水荃孟末 小川為義 小林雄精 金龍院 孤蓬

庵 並河尚教 立入宗信 山中猷從五位 下橋敬長 植西

泰明 石野從四位外四人 山崎庄藏外二人 松室重礼 安

井九兵衛豊岡神官 河原崎利兵衛 同嘉兵衛 千某うら外

式人 北小路叟助 馬場顯東 浦野某 中山某 近藤律山

秦久敬 宮部惟孝 聚光院牧宗 津田信克 千尋等

飯代三錢七厘 酒壺舛八合 肴四□之代金壺円

毛セン持寄 総見院小錢奉納

参会者は新年であるためか、三十八名と十五回中最多の数であり、半分は初参加である。公家の石野氏や裏千家からも参加があつたが、初参加者がその後も続かないのは何故であらう

か。出品も多く九家から六十四点の出品があり、これも展観の中で一番多かつた。小林家から二十三点、並河家から十五点の数である。会場は大徳寺の中の総見院で昼食、酒肴も出た。残金は総見院へ納めた。このやうに盛んであつたものの、これ以降は低調になつて行く。

第十三回は二月十五日に行なはれた。

(二月十五日 月次小集席) 森舛 来集人名

竹川友廣 小林良孝 矢盛教愛 大橋方武 泰久敬 下橋

敬長 立入宗信 山下豊泰 宮部惟孝 津田長興建勲宮司

田中喜十郎同權欄宜 佐野久成豊國權宮司 安井九兵衛同

權欄宜 鈴鹿熙清日吉權欄宜 松岡正根 鈴鹿義鯨

橋口兼則 野村綱紀 千尋

参会者は十九名で、今回も初参加者が多く、神職が四人見える。六家から二十八点の出品があつた。十一回以降進藤家からの出品があるが、会の盛り返しには至らなかつた。今回も小家から六点、並河家から五点の出品があつた。

第十四回は三月十六日に行なはれた。

(三月十六日 月次小集) 席森舛

来名 馬来伸 矢盛教愛 立入宗信 宮部惟孝 下橋敬長

鵜飼敬 石津筈三郎京府権少属 同時三郎 滝原勝信 並
河尚教 磯谷台陽 津田信充 岡本保益 千尋等
参会者は十四名で新人もある。立入家から六点、並河家から
四点など、六家から十八点の出品があつた。会場は二月に続い
て森栞であつた。この回を以て一年以上休会になるのだが、そ
の原因はこの記録からは読み取れない。

第十五回は十年五月十六日に行われた。

(十年五月十六日月次以文小集) 再興会之席 丸大町森栞
来名 勢田章甫 秦久敬 矢盛教愛 立入宗信 進藤千尋
林一郎 津田信克 小林良孝 山下豊泰 小野澤基豪 立
花青齋 馬場文英 大浦宗植 山根□輔 井関良顕 戸田
保憲 岡本保益

どうしたとか、九年四月以降、中断してゐた以文小集会で
あつたが、一年二か月を経過してこの年の五月に行なはれた。
〔再興会之席〕とあることがそれを物語つてゐる。それでも参
会者は十八名で、矢盛教愛、立入宗信、津田信克、小林良孝
下橋敬長と言つた古參の顔ぶれとともに有識に名高い勢田章甫
ほか七人の新人が加はつてゐる。進藤家から五点の出品があつ
たことしか書かれてゐないが、会を継続するための千尋の思ひ
が伺はれる。参会者があるのだから、他にも出品はあつたので

明治初期、京都における古器古物の展覧(中澤)

あらうが、以下は余白となつて何も書かれてゐないのは何故で
あらうか。再興したものの継続ができたのか、この会を以て中
断したのかは定かではないが、十五回継続した意義は大きいも
のがあつたであらう。先にも書いたが、千尋はこの翌年の七月
に逝いたので、この会の運営もこのあたりで停滞、残念ながら
中断したことと思はれる。

以上、十五回にわたる集会の概略を述べたが、参加者も毎回
入れ替はり、主宰した進藤千尋は当然としても、他は決まつた
人物で継続的に続いてゐないことがわかる。出品物も主に書が
多い。

六

明治初年の京都に於いて、小規模ながらこのやうな好古の会
が開かれてゐたことを手許の資料によつて紹介してみた。禁門
の変で焼けたと言ふ京都ではあるが、まだ貴重な品物は健在で
あつた。これらの品を並べて展覧すると言ふ行為は、所有する
自己、または自家の名譽を公にすることもあるが、東京奠都
後十年たたない旧都に対する、特に地下官人の懐旧の念を汲み
取ることも必要ではなからうか。それゆゑに長続きはできな
かつたのであらう。京都の町の荒廢は明治十年代が甚だしく、旧

都の荒れるのを無念に思召す明治天皇の叡慮から古都保存の考へが盛んになつていくこととなり、またこのやうな好古趣味は明治の時代を迎へ博物館の設置と言ふ文化財保護の考へに結びついてゆくのである。

※本書は畏友宮崎和廣氏の旧蔵書であり、これを購入時共同で翻刻作業をし、解題を付する予定であつたが、お互ひに仕事が多忙となり、なかなか手を付けられずには過ぎ、いづれの時にか世に紹介すべきだと氏は私にこの作業を託されたのであつた。そのまま氏は平成二十八年十月末に急逝されてしまつた。残された本は私の手許にあるままである。そこで思ひ立ちこの資料紹介の文を書いて、氏が生前にできなかった思ひを晴らすことが、恩顧に少しでも報いるものだと思ひここに纏めた次第である。幽界におはして拙稿になほ不満があるやもしれないが、せめてもの我が思ひを聞き召し給ふなら有り難いものと思ふばかりである。

註

(1) 三宅米吉『以文会筆記抄』昭和四年 雄山閣刊

(2) 管宗次『京大坂の文人 続々々』(平成二十二年刊)所

収の「明治八年以文社「年号展覽目録」による。それに

よれば、この会の出品者は下橋、宝幢寺、並河、小林、井上、進藤、中嶋、水荃、矢盛、宮部、植西、竹、津田など多く重なる人物である。なほ、年号展覽の同じ目録が慶応大学斯道文庫にも存する。(「描かれた古」小図録 平成二十八年十一月く同大学斯道文庫での展覧)

(3) 明治四年から開かれた京都の博覧会にも小林は積極的に出品してゐる。山本真沙子「明治京都における官製「美術」概念の受容」民族藝術二十五号

次にとのやうな品物が展覧されたかを、書かれてゐるままに挙げる。但し作者の伝を記した「札記」がそれぞれにあるが、ここでは全て省略した。(判読不明な文字は□とした。)

第一回 出品 明細目六

一 聖徳太子 寶塔経 銀経 十六行アリ一行十字 凡豎八寸七分 畑氏所持

紺紙 金字一字コト金泥寶塔アリ

奥書 右件経片及以別□紫紙金字経片 今茲弘化四年丁未十

月廿五日授与 権上坐實誠大徳者也 法印大和尚

花押 記之

裏書 聖徳太子御書一字塔之法華経残片 壹拾陸行 天保年

中和州駒塚 太子御駒埋葬之地 東福寺主詮衆□□贈
与于宗測也

一光明皇后 大般若經 卷第六十六

同氏

黄紙金掛引一行十七字金字 全一卷豎凡八寸四分

一伊豆内親王御遺言写

並河氏所藏

石摺 八行 初行 天長十年九月廿一日

末行 面受遺言元品内親王 伊都

御影四印中不分

一青龍院宮御消息切 七行

進藤藏

御名アリ 初行可被行僧事之由 未行八月廿四日

慈道

一大塔宮 座摩太神宮神号 渡邊近江守都下朝臣資政摸刻

同氏

一大乘院宮御讓狀 十二行

武田氏所藏

初行 平等房領山城國大原

末行 阿闍梨 花押 親王

一後青龍院宮真跡 祖師御消息写 十三行

進

初行 傳法事一

末行 正月二日 御押

一後大乘院宮 三首御懷紙

進

詠三首和哥 道圓

一獅子吼宮和哥色紙 小色紙 豎五寸五分 横四寸九分 古歌

川邊卯花 ふく風のさそふにつけて玉河の浪

にかゝれるきしのうの花

初聞郭公 ほとゝぎすねざめの時はいつより

も猶めづらしき初音なりけり

契不逢戀 さしもげにしゐて契しかひぞなき

さてもつれなき人の心は

一同御消息 八行

初行 日吉客人神輿

進

末行 宛 室町殿

一後崇光院 續古今和哥集 真名 假名序 全 後藤氏

一桂蓮院宮 祈禱卷数案 天文二年五月三十日御名アリ

一 同假名□文 天文七卯廿一 御名アリ

一 陽光院御消息 御諱□□ 和□師奥行の事

一 龍華院宮御消息 筑後奉書 杉紙十二行 御名アリ

一 花町宮御懷紙 豎一尺二寸二分 横一尺五寸

春日詠花有喜色和哥

式部卿良仁親王

としをへて猶さかへいくきみが代にあひに□たつ花のい

ろかな

一獅子吼宮和哥色紙 小色紙 豎五寸五分 横四寸九分 古歌

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

進 第二回 出品

一 後桂蓮院宮 神号 絹地 竪六尺四寸 南無天王八大王子

八字

進

一同 詩稿 七行 義諦稿トアリ

同

一本 覺院宮 一行物 竹開霜浮□ 御印悪巖 白字 鳥居川氏

一同 大字石摺 柿本寺歌塚碑大字石摺 並河氏

付裏銘 佛國寺百拙撰十五行 享保壬子年

銘曰

大和國添上郡樸本郷人麻呂歌冢碑陰記・・

付柿本寺沙門慶範勸進状 文明八年ノモノ 寛政十一六六源

弘賢摸刻 五十一行

一 靈元院皇女 清浄光院宮 御衣切 白生 瓜ニアラレ 按五

ツ衣御鱒ノ紐カ

一氏

以上二十点 品数付品共 二十六

一 上東門院御墳墓考 半紙六枚

一 童子のとひにこたふ 短冊三枚

右二点 別記ニアリ

又上東門院陵考

一 小色紙 和哥式首 竪四寸六分半 但切レ也口半カ

若王子社司伊藤氏

一 消息 御名アリ 文中ニ後醍醐院御返翰御諱□□

進藤

初行 以了返々遺恨

末行 八月十三日 慈道 竪凡一尺六分 横一尺

七寸

一 東山泉涌寺古圖 時代不知 井上氏

圖上 勅觀覽事之四字ハ後奈良院宸翰ト云 今ノ伽藍トハ

大ニ違フ

一 十七憲法 寛文印本トハ文字等大同小異也 一冊 進藤

奥云 明應六年九月十四日俄有所用模写之 追而可

書改者也 不可及他見□□花押

一句題百首和哥

進藤

初行 雲霞出海曙

末行 堯時奉万年 限なしやかの白雲にのるといひ

し仙人の身につもるとしどし

奥云 先師桂蓮院二品親王真跡者也 同御詠歌也

尤無疑

御百首一段可為見半以 花押 之 尊親王

御若手之御押也

但表題 尊親王

一 讓狀 竪八寸貳分 横一尺四寸三分 一卷 伊藤氏

大峯葛城熊野等縁起 在本目録 并役行者蓑傘讓与之一期

之後 土御門宮カ 押小路入道殿下若公カ 入當道為其□

量者者可被讓遠也 御状如件

延慶二年六月五日 前大僧正

添紙云 元禄十二年之勘物也

覚

土御門親王之御事

押小路殿下之御事 不考得候

三條公茂卿ヲ押小路内大臣と申候 正中元年正月四

十一歳ニテ薨去ニ御座候 時代少相違仕候 二條殿

尹房公晴良公関白ニテ御座候 二條押小路ノ亭ニ御

住居候へ共大永天文之頃ノ御人故時代相違仕候

元禄十二歳四月十日 平田内匠允 印二顆

同裏書云

一 消息文 竪一尺一寸貳分 横一尺六寸一分 進藤

初行 明日□□嶺院御必定之由

末行 尊酬 信尋

一 消息 竪八寸六分 横壹尺三寸七分 同

儀内ハ歌書請取候ハ、品宮へ直ニ此文持參申上候 此状ハ

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

今日返し被下候 此書はあなたにたく御くろうにあそばし

□□候 これうたうた文にてよく申遣候間 其後口上にて

□お礼よく候

宗女 花押

一 古哥切 白地金経上下金砂子ノ紙 古哥五首墨書 同

一 畧懐紙 二幅 竪一尺一寸二分 横一尺四寸六分

一 並河先生持參 二十二社巡拝序 梅辻氏

以上

一 並河先生持參 二十二社巡拝序

夫畿内の輿地志は己酉の春並河五一先生承 公命を五畿を巡

視し 神廟佛客名区興廢山川名勝正之ニ五たび年序を歴て功

を終へ玉ふ やつがれもその事にあづかりて これに随ふ

其草稿ハ豆州三寫社庫におさむ 後先生も三島に寓居し給ひ

て・・・翌巳の春・語らんがため三島にいたる 此時か

の社庫に納め玉ふ畿内□□とこの由来俗家の由緒書等所々よ

り差出す所の記録百里をへだてて有んは無益のこと、思ひ

是を畿内にとゞめ給へと請ふ 先生諾して三島の社職矢田部

氏に計りてこれを社庫より出し 予に付与し給ふ 於是退き

て列志を□て撰の式内神社巡拝を撰む（畧）

元文六年酉仲春廿五日 摂州東生郡榎並庄赤川村 久保重宣

並河尚教翁札記云

五畿内志編集ノ節 諸所ヨリ記シ来ル書類畿内諸社ニ納メ
有ルベキカノ由此序ニ見エ何トゾ諸君御心掛ケニテ何ノ社
ヤ搜索アリテ御トリ出シテハイカマヤ 當今ヨリ凡百五十
年前其節ハ五一採用セザレド當時ニテハ異聞ノ又考證ノ一
助ニ成ルベキアランカ 先年谷森氏ト語り合ヒシ事モアリ

第三回出品

一 伏見院御哥集 冬部 九十五首一卷 進藤
後伏見院宸筆

裏正和四年具注曆 八月一日至十二月三十日

奥二曆博士在材以下

一 陽光院宸筆 假名御手本 源氏切 一卷 立入氏
一 後陽成院宸筆 天満宮神号九字 一軸 宮部氏
一 後光明院御製御短冊 打雲紙 立入氏
深山月 山路わけ照影清しいにしへも今もかはらぬ有明
の月 御諱
一 新上西門院御筆 古歌色紙 小林氏
一 桂光院宮御消息 宛名四僧 一軸 伊藤氏
一 女二宮御筆 古哥色紙 小林氏
一 御壁書 寛永廿一年尊敬親王勸学之時 進藤
師宮尊純親王真筆

一成輔親王真跡 朗詠詩一首 祝長生殿一二行 一軸 進藤
准三后押親王書之七十九歳

長生殿ノ詩二付ス

一 慶滋保胤真跡 十八行 影刻 畑氏

一 石摺 拾遺帖 拾遺倭歌集第十六 歌数十二首 一帖 並河氏

員外 伏見帝宸筆

奥書云

此一卷正応聖主所御染宸翰也 寔如遊龍明水景山興雲殊御假

名之文字出入古今者乎

寛永第七六月仲旬 正二位行権大納言 藤原朝臣光廣

第四回 出品

一 大塔宮御消息 文中堀河中納言ノ名アリ 下鴨 山中氏

御押入

一 龜山院皇子 二品慈道親王真跡 授許可作法 進藤

裏高貴御消息 奥書尊円親王

一 後陽成院道晃親王御筆 出山釈迦 墨絵絹地 立像

花押書焉トアリ 若王子殿

一 尊純親王真跡 釈尊年譜 紙中経アリ 一軸 進藤

一 後西院皇女平寛院宮真筆 半切一行物 一軸 津田氏

一 御自詠短冊 名入 後陽成院皇子好仁親王 小林氏

一 哥御詠草 名入 後西院第九皇子尚仁親王 一軸 小林氏

一 筆々之絵 タンセン形 自贊詩二句 後水尾院十三皇子周賢

親王 進藤

一 石之絵 光格天皇御養子有道親王 進藤

員外

一 光嚴帝宸筆御直文 康永二年四月十三日御諱御押アリ 武田氏

一 廣橋兼宣狀 稻荷五社神主御次事 左少弁兼宣 並河氏

一 廣橋從一位兼胤公哥 懷紙 題水石歷幾年 儀同三司兼胤卜

アリ 並河氏

一 武速須佐之男命 七字神号 撰政前左大臣從一位二條齋敬筆

一 中御門勸修寺尚良卿筆 正二位權大納言 一卷 立入氏

以上 員外也

一 後陽成院皇子 良純親王 御書 知恩院宮 號八宮

一同皇子 尊性親王 御書

光嚴帝御直文宸筆 康永二年 御諱御押被遊

第五回 出品

一 曆應 建武 正安 正應等年号付古文書六通 高雄山神護寺

領之文書也 小野澤氏藏

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

一天平十七年大藏省仕丁等移 在印 並河氏藏

但文中甲賀宮立丁廝丁 久仁宮立丁廝丁等「アリ」

一天平感寶元年詔書 写 遠江國平田寺藏

一天平勝寶元年詔書 写 本物銅板 今石摺

一天平寶字七年 曼陀羅 世三云浄土曼陀羅 印

一貞觀十三年小水麻呂名有佛師奥書 石摺

一天延二年太政官牒 東大寺 写

一大治元年地券

一承安三年沽却券 □澄寺東室

一建久四年 〃

一治承五年 勘文 東大寺焼亡 中原師尚

一養和元年 勸進帳 写 東大寺俊乘房重源

一永仁六年 灌頂文書 審盛

一永享二年 綸旨 東大寺

一建武三年 伝法灌頂

一永享十一年 貞次刀銘

一正平本 論語 四冊

一正暦元年 陽明家日記抄

一長徳二年 祈願文 丹波國三嶽山

一三条西公條公書翰 五通 一卷

一徳治二年掃部寮文書 小林氏

一 建武四年掃部寮文書

一 光格天皇御持古御扇 一本

一 閑院典仁親王御詠草

一 林丘寺宮 元瑤御印影 二

一 同 元秀御印影 二

外ニ御藏印 韃字印影 二面 但文字不知

一 林丘寺宮 元秀御本心經 松嶺元秀トアリ

一 鷹司政通公短冊

一 古代馬ノタヅナ 鐵造

一 後桜町院宸点 女房衆詠草 二紙

一 古文書 消息文 実隆公等ノ名アリ 一卷

一 寶龜四年 癸丑年菊燈基 一基

一 天安二年 比枝山西塔寶幢院鳴錦銘 写

一 統和元年寶泉

第六回 出品

一 後陽成院皇子吉宗親王御画 瀆苦屋之圖

一 中御門院皇子勝妙樂院宮扇面 月大小之御哥

〃 一 勸修寺經逸公 實孝明天皇外祖 懷紙

〃 一 鷹司政通公作 コンロ 角 號 印 爐 在銘

〃 一 小田信長公狀 □岩坊 墨印アリ

津田氏 一 加茂社大鳥居木 切端 安永之字有之

第八回 出品

一 伏見院春日社へ御願文

第九回 出品

一 光嚴院宸筆御消息

一 鷹司政熙公 三大字 樂山八十翁書トアリ

一 近衛家久公哥

一 藤齋敬公消息

一 豊臣秀吉公 状 写

一 近衛行尹公 哥

一 高津齋彬 短冊

一 小林良典朝臣 短冊

一 熊野御幸 古絵卷 写

一 徳川家康公状

一 後陽成院御消息

一 勸修寺教秀公 後奈良院外祖 詩懷紙

下橋氏

小林氏

〃

〃

〃

〃

〃

〃

進藤

下橋

下橋

植西

下橋

小林

井上

小林

〃

小野澤

立入

〃

〃

第七回 出品

一 一休和尚墨絵

下橋氏

一 楠正成公 小絵像

一 一條忠良公詩

一 三寶院高盧准后消息切 □准后トアリ 淨功德院宛

一 鷹司輪照公北政所 消息

一 古文書 康安三年

一 禪僧周澤直文

一 天慶九年 安典申文

一 建久五年 慶恩田地沽券文

一 建保五年 良算書 愚草

一 承久三年平群郡夜摩郷秦氏買券

一 安貞二年東大寺梵網會寄進田地券

一 貞治四年石山寺北室坊銅關阿伽桶模字一枚 石花墨摺

第十回 出品

一 尊證親王筆 画

一 尊寶親王 岩画

一 尊超親王 竹画

員外

一 鷹司教平公 詩哥

一 聖護院通證准后 哥卷

一 梅尾高弁 文

小林

津田

〃

下橋

磯谷

〃

並河

〃

並河

〃

〃

〃

一 姉小路—— 短冊

一 藤井貞幹 遺墨類

百官書入本並河藏 船氏墓誌 好古小録並河藏 古印譜

竹氏 古瓦写 小林墓摸

一 穗井田忠友 同断

墓摸下橋 觀古帖 古瓦集序 書状

外二

一 保延六年 位記 次 天皇御璽印

天平勝寶年間文書切 古印切 正藏院中琴打摸 同朝鮮ノ

物 太刀 藤貞幹古瓦写二枚

一 近衛龍山 詩カル夕

右

一 寺町誓願寺二奉葬皇女御墓銘 写二枚

下橋

(附箋)

記

一 保延六年十一月十九日位記 并正治文書 無年号文書

右合卷卷 原本

一天平勝寶年間切 法隆寺印有

一天平年間文古写 一卷

一 正倉院琴写 一卷

一同太刀写 一卷

小林

伊藤

〃

明治初期、京都における古器古物の展観(中澤)

一 藤貞幹古瓦摺 二枚

一 近衛龍山公 詩カルタ四枚

一 鷹司教平公詩歌懷紙

右八品

明治八年十一月十八日 小林良孝出品

第十一回 出品

一 龜山院皇子桓明親王御消息切

一 後二條院宸筆 哥切 一枚

一 慈鎮和尚 四半切

一 古文書 田券類 延文至寛文廿九通 一卷

一 本居宣長書狀 宛蓬萊大夫 一軸

一 平田篤胤 古史傳稿

一 上田秋成 文

一 伴林光平 短冊

一 九條家西園寺家 車圖 二枚

一 御一新之砌神宮へ被納候御銚圖一卷

一 鷹司撰山公好茶之書

以上

新聞(省略)

第十二回 出品

一 豊臣公 皇胤卜云 画像 狩野家所絵卜云

一 同豊國社旧惣圖 元和年中所圖之物 大軸

一 施無畏王院宮 式行物 絹地長生殿

一 道円親王 二首懷紙

一 太上天皇御願文 石摺

一 大聖寺永皎 詩

一 淨照明院宮 たにさく

一 寶鏡寺本覺院宮 一行物

一 後小松院第五皇子一休和尚筆

一 秀吉公 一行物

一 古矢根 銘兼氏

一 鷹司政通公 一條忠香公合作 茶碗

一 光明院 御切

一 後鳥羽院

一 大塔宮

鎌くら最明寺

織田信長公 かな物

右五点 一帖

一 尊朝親王 詩歌 一軸

一 八条智仁親王 哥切

水口氏

進藤

〃

〃

進藤

津田

〃

〃

〃

水口氏

〃

津田氏

植西

〃

〃

〃

〃

〃

〃

小林

一 同 □□小切 奥書 □之物	〃	一 同光貞公 状	
一 同 智忠親王 懷紙	〃	一 豊臣氏譜 三冊	並河
一 同尚仁親王 詠草	小林	一 天正武鑑	
一 德川光圀状	〃	一 二神修理之千字文	
一 鷹司信房公 哥切	〃	一 豊公朱章	
一 同房輔公 懷紙	〃	一 高麗古文書 写	
一 三條實万公懷紙	〃	一 文祿三 布令 写	
一 德川齊昭卿短冊	〃	一 女房奉書 朝鮮事件	
一 車圖式 二卷	〃	一 藤田玄以外二人 花押	
一 博古帖	〃	一 玄以祐筆梅軒文	
一 集古十種 印章部 七冊	〃	一 豊公肖像影本	
一 古代壺	〃	一 同朱盆	
一 織田信長公右近府宣旨	〃	以上並河氏	
一 〃 鞆 矢老共 鞆紋付 甲背鏤	〃	一 信長公傳來 双刀 拵付 御光作	立入
一 秀吉公半弓 鎗 矢根 方盆	〃	一 天正時代短冊	〃
一 秀頼公 銅印 千財	〃	一 織田譜 一冊	並河
一 聚楽亭所用 大板子	〃	一 光秀以下連哥 一卷	
一 鷹司輔熙公作 茶杓	〃	一 同連哥記 一通	
一 廣遍祐窓短冊	〃	一 井戸某 文 一幅 庄村蔭申云 四良大夫カト	
一 宝船捺印	〃	以上並河氏	
一 德川光圀公書状	〃	一 靈元帝宸筆 小色紙	山科

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

一 梅尾高弁状

一 千五百番哥合卷切 称本能之切 摸之

右いづれも札記千尋認之付之

一 神代 壺

水莖

一 古代石帯 欠石 白青二顆粒 三輪山所出ト云

一 安南國勘合并璽 永祚十年本朝永祿十一年カ 写

右札記ナシ

一 王手習 写

一 近衛信尹君真跡

山下氏

第十三回 出品

一 後大乘院道円親王消息 宛室町殿

進藤

一 龍池院宮円頓章 在押

一 本覚院宮一行物

馬場氏

一 足利義尚公消息 宛青蓮院殿

一 織田信長公 弓掛 一

小林氏

一 大乘院宮消息 写

矢盛吉田氏

一 藤房公 正成卿 正行朝臣等 二首懷紙三枚石摺

一 梶井尊悟親王消息

一 楠氏 幡 写

小林氏

一 龍池院宮詠草

一 水戸弘道館碑 石摺

一 聖護院盈仁親王 一横物内福寿之一字写

一 信長公宣案

一 有栖川職仁親王 消息

右六点小林氏

一 本覚院宮 半切

一 撰津國惣圖 正保三年ノ写図

進藤

一 曼殊院宮覚想准后消息

一 豊公画像 唐冠小直衣 太刀 坐ブトシ紅白段 藤寄氏藏

一 毘沙門堂公祥權僧正 〃

佐野氏出

一 昭高院道澄准后 〃

已上

以上九点 吉田氏

外二先會水荃氏ヨリ出品有 古器ノ品評書 千尋稿(省略)

九年一月十五日

進藤千尋稿

右進藤老人勅物之

一同無異物候 第一之古物と可賞候也

明治九年一月十五日

㊦ 以文小集會

會當

津田信光

補助

小林良孝

秦 久敬

植西泰明

宮部惟孝

一正三位家隆卿狀 名ト所ニ家ノ字一ツアリ不紊心ナレモノ 〃

一海軍卿勝安房殿 古躰ノ船之長哥 一幅 安井氏

一延曆四 僧正牒 石摺 一帖 並河氏

一正和二 東福寺土牒 写 一幅 〃

一天文 鶴ヶ岡人書 一ふく 〃

一古文書 写 七通 〃

一永仁二 石津庄古文書 一幅 石津氏

但考證書類 并副本合十通添

一〇〇〇十二本〇 銘云 応永十九年八月日敦秋作

恩徳院住持詮藝 名年次 摸 辻氏

第十四回 出品

一龍池院宮真筆 龍虎 二大字

一聖護院一品盈仁親王 一行物 清風明月

一同真作 〇〇〇匙 〃

員外

一豊臣秀吉公〇章 二通 一卷 石津氏

〇ハ与内大臣書 一ハ与寺沢氏筆也

一後光明院御詩集 立入経德筆 一冊 立入氏

一一條忠良公真筆 一ハ一行物 一ハ墨蘭 二幅 〃

一甘露寺経元卿筆 和哥会次第 一冊 〃

一京極黄門定家卿記録切 世二小記録 一幅 押小路家

一源義経状 名判アリ 切トミユル 一幅 〃

明治初期、京都における古器古物の展観（中澤）

第十五回 出品展観

鎌足公真像

相州江島上宮碑石摺

天海 文

時亮 二字

武者小路實岳公短冊

右進藤

（なかざは のぶひろ・東京都立小岩高等学校主幹教諭、

國學院大學兼任講師、博士（神道学））